

平成 27 年度三重大学国際交流事業実施報告書 (学内版)

1. 申請部局

学部・研究科名等： 人文学部

事業担当者の職・氏名： 准教授・藤本久司

内線電話番号： 9123

電子メール： fu0331@human.mie-u.ac.jp

2. 事業の名称 (20 字以内, 別に副題を付けても良い)

ブラジル・スタディツアー企画のための準備調査

3. 事業内容の別 (該当するところにチェックを入れてください。)

教職員, 学生の海外派遣 (学会やシンポジウム等の出席は除く)

海外交流機関等からの教職員, 学生の受け入れ

国際教育プログラムの開発や推進

その他

4. 事業の取組結果

(1) 事業概要 (簡潔に事業全体の概要がわかるように記述してください)

平成 28 年度から、三重大学の学生が、ブラジル・サンパウロ市を中心とした日系社会にかかわる関係者、関係箇所を訪問し、日系移民の歴史や文化、日系人コミュニティの現状に加え、現在のブラジルの社会、文化、経済等を学ぶスタディツアーを企画する。今回、その準備調査のため関係者、関係箇所を訪問、協議し、ツアーの実現に向けその課題を探る。

(2) 事業の背景・これまでの実績

サンパウロ州と三重県は 1973 年に姉妹提携を結び、長い交流の歴史がある。現地の三重県出身者、関係者の日本人、日系人で作るサンパウロ三重県人会の組織も堅固で、活発な活動を行い、これまでの官民双方の交流拡大に大きな力となっている。一方、三重大学人文学部とサンパウロ大学哲学・文学・人間科学部との学部間協定が 2015 年に大学間協定となった。この間、2013 年度と 2014 年度にサンパウロ大学の交換留学生各 1 名を人文学部で受け入れ、2015 年度に人文学部学生 1 名がサンパウロ大学に留学し、教員相互の派遣、訪問の実績も重ねている。今回の企画はその交流を学生間に広げる可能性を探るものである。

(3) 事業実施結果

調査日程：平成 28 年 2 月 9 日 (火) ～18 日 (木)

調査人員：人文学部教員：藤本久司 <他 1 名が学部事業で同行>

調査地域：ブラジル・サンパウロ州

調査訪問地：サンパウロ大学、サンパウロ三重県人文化援護協会 (三重県人会)、
移民博物館、ピナコテッカ美術館、ブラジル日本移民史料館、
リベルダージ、ニッケイパレスホテル、
東本願寺、西本願寺、他 (以上サンパウロ市内)
東山 (とうざん) 農場 (カンピーナス市)
アルモニア学園 (サン・ベルナルド・ド・カンポ市)

- ・現地の関係機関の担当者・関係者と実際の学生研修 (訪問、交流) を想定した具体的な協議を行った。
- ・この他、訪問団体関係の記念式典、組織幹事の懇談会、現地関係者との会議などで意見交換・情報収集を行った。
- ・今回、訪問できなかった研修候補地についての情報収集もできるだけ行った。
- ・通訳を元三重大学人文学部交換留学生 (現サンパウロ大学生) に依頼した。
<別途学部事業費による>
- ・株式会社アルファインテル (本社=東京都港区) にビザ、現地の車等の手配依頼

学生研修 (スタディツアー) 実施の場合に考えられる例：

○コンセプト

- ・日本人移住者の足跡をたどり、学ぶ
- ・過去および現在のブラジル社会における日本人、日系人の活躍の現状を見て、学ぶ

- ・ブラジル経済の現状を知り、日本企業の役割に触れ、学ぶ
- ・多文化社会、移民立国ブラジルを多面的に学ぶ

○日程等

- ・例1：サンパウロ大学での研修を主にする場合

10日（大学での研修期間）＋2,3日（大学以外）＋往復3,4日

1日目：中部AP発——（経由地＝中東、米、欧など）——

2日目：——サンパウロ着

3日目～14日目：サンパウロ大学での授業、学生交流、シティーツアー

15日目（及び上記の中の週末）：独自訪問（三重県人会や日本企業と協力）

16日目：サンパウロ発——

17,18日：——（経由地）——中部AP着

- ・例2：三重県人会を通じた訪問地を主にする場合

6～8日現地滞在＋往復3,4日

ブラジル移民に関する史料館・博物館、日系人芸術家に関わる美術館、移民慰霊碑、日系人経営農場、市営市場、日系企業、日系人福祉施設、小中学校、日系の宗教施設、サンパウロ大学、三重県人会、東洋人街などを訪問研修。様々な場所で関係者のヒアリング、資料収集、対話交流を行う。

《参考》2016年の筑波大学の学生短期留学

時期：2016年2月末～3月上旬

参加者数：学部生・院生計8～10名

プログラム名：「ブラジル研究入門」短期プログラム（学術協定に基づく）

授業の内容：

- ① 大学での「ブラジル研究入門」授業（ポルトガル語初級、ブラジルの歴史・文化、日本移民史、ブラジル社会学概論など）
- ② City Tour（サンパウロ市内＝市営市場、ピナコテッカ美術館、サンパウロ美術館、日本移民史料館など）
- ③ 両大学の学生交流
- ④ 参加学生によるフィールドワーク（予備調査）

参加学生の身分：短期留学生（大学図書館や食堂などの利用可。）

終了時に認定書を授与）

宿舎：大学の紹介する民間ユースホステル

（ビラ・マダレーナ地区…大学への自由な通学可能で比較的安全な、若者の多い場所）

授業料：講師費用等はサンパウロ大学で負担。学生は宿泊費、食費等生活費実費を負担。

総括：5月にサ大教員、職員が筑波大に行き、共同でセミナー開催。

その他：日本の学生が日系社会だけの研修（日一日だけの交流）にならないように図る。

- ・オリンピックと大学の開校期間の関係で、実施が可能な場合でも2017年3月以降

となるが、いくつかの課題をクリアする必要がある。

●研修実施の際の課題点

1. 治安と衛生上の問題

近代的なビル街、住宅地、店舗地区、ショッピングセンターなどが開発され発展する一方、いずれも隣り合わせに広範囲な貧困地区が存在する。現在経済の低迷、若者の失業、一部富裕層と多数の貧困層のギャップの拡大、若者犯罪の増加、水道・下水道施設の不備、河川の汚染、衛生についての意識の低さなど、軽視できない問題が存在する。

そのため、研修を実施するのであれば、自由行動の時間には必ず団体で行動をすることを基本とし、滞在中の注意点については事前研修で指導する必要があるが、十分な対策とは言えない（ブラジルの社会情勢に精通した教員が研修を行うのであれば、徹底できるかもしれない）。安全面を考慮すると自由行動の時間も外出を禁止した方が良い（サンパウロ大学教授談）。

…外務省ホームページではブラジル現地の情報は以下の通り（2016年2月現在）

- ・犯罪被害等の危険度レベル1（十分注意してください）
- ・感染症危険情報レベル1（十分注意してください←ジカウィルス感染症）

《参考》外務省海外安全ホームページより

1. 犯罪発生状況

（1）全般

ブラジルは世界的に見ても非常に高い頻度で一般犯罪が発生しています。また、麻薬に絡む組織的な犯罪も多発しています。これらの犯罪の手口は凶悪で、多くの犯行にけん銃等が使用され、抵抗すると殺害される可能性があります。観光地においても凶悪犯罪が多発しているため油断できません。また、ファベラと呼ばれる貧民街は犯罪の温床地域であり、立ち入った者が殺害されることもありますので、絶対に立ち入らないでください。

（2）強盗

けん銃等の武器を使用した強盗事件が多発しており、日本人も多数被害に遭っています。また、抵抗すると殺害される可能性が高く、最も注意しなければならない犯罪の一つとなっています。一般に都市における強盗被害に遭う確率は、米国と比較すると約10倍、あるいはそれ以上であり、十分に注意しなければなりません。キャッシュコーナーで現金を引き出した後及びショッピングセンターなどから出た後にねらわれやすいので、注意する必要があります。

（3）短時間誘拐

ブラジルでは短時間誘拐が頻発しています。これは「電撃誘拐」ともいわれ、金品や車両を強奪するためにけん銃等を使って脅迫し、被害者を一時的に拘束する犯罪です。拘束後は、ATMで現金を引き出させたり、携帯電話や車両を奪った後に連絡手段のない市街から離れた場所で解放するのが特徴です。車の乗り降り時及び停車時にねらわれやすいので、常に周囲の状況を確認し、不振な者がいないか注意してください。

（4）スキミング被害

クレジットカードのスキミング被害が多発しており、一流ホテルでも多くの日本人が被害に遭っています。店員に見える場所で決済させるようにする等の注意が必要ですが、スキミング行為は瞬時に行われ、防ぎきれないところがありますので、利用明細書等を小まめに確認してください。

2. 都市別の被害<抜粋>

【サンパウロ】

(1) 犯罪発生状況

サンパウロ州保安局の統計では、犯罪発生件数は全般的に増加傾向にあり、特に凶悪犯罪である殺人及び強姦事件は増加しており、未だ高い割合での犯罪発生実態が読み取られます。邦人被害の発生が多い強盗事件（短時間誘拐を含む）については、依然として高止まりの状態が続いています。1年間の強盗発生件数を人口10万人当たりで算出すると、サンパウロ州が約736.3件、サンパウロ市に限ってみると1294.7件の発生率を示していますが、これはあくまで警察に対して申告された数であり、実際の数は同統計資料よりも大幅に多いと考えられます。なお、サンパウロにおける凶悪犯罪は銃器を使用し、地域・昼夜を問わず恒常的に発生している事実が認められ、抵抗・逃走等を試み、その対応を少しでも間違えば命を落とすなど、身体的被害を受けるケースも多数起きています。

さらに、現地軍警察と犯罪組織PCC（Primeiro Comando Capital・首都第一コマンド）との抗争激化等に起因する治安悪化もあり、サンパウロに在住する邦人の体感治安は悪化し、改善の兆しは見られません。

蚊は、サンパウロ大学構内や調査訪問先のみならず、窓を閉めてエアコンのかかった中級ホテル内、中級レストランでも飛んでいる。大学の公式の研修として行う場合には、慎重な判断が必要である。（オリンピックなどの）イベントのある今年（度）は（感染症が流行するので研修を）やめた方が良いという指摘もあった。さらに、訪問先の中には、職員がデング熱に感染しているという施設もあった。厚生労働省はブラジルへの渡航に際して、下記の通り注意勧告しており、健康面についても熟慮する必要がある。

《参考》厚生労働省ホームページにおける注意勧告

- ・蚊やハエなどの昆虫が媒介するもの：ジカ熱、黄熱、マラリア、デング熱、フィラリア症、シャーガス病、リーシュマニア症、住血吸虫症
- ・ネズミなどの糞尿から感染するもの：レプトスピラ症（ワイル病）、ハンタウイルス肺症候群
- ・ウイルスが人の手を介して水・氷や食物が口に入ることによって感染するもの：A型肝炎
- ・その他：B型肝炎、破傷風、類鼻疽、狂犬病
- ・動物・虫への注意：蛇、サソリ、くも、毛虫などの毒

2. 受け入れ主体と研修訪問地の問題（サンパウロ大学、三重県人会等）

学術交流協定に基づき、大学間の交流を主に考えると、正規の短期留学生として

サンパウロ大学に籍を置き、大学の施設を利用させてもらうことが可能であるかもしれないが、課題も多い。大学キャンパスは広大で学部間の移動も車やバスが必要な状況である。大学周辺にはスラム街が存在する。大学から紹介されるユースホステル、ドミトリーは安価で、これまで海外の学生が宿泊しており、大学に近く、比較的安全といわれている場所にあるが、否定的な意見もある。また、学生同士の交流も行うとともに、週末など、シティーツアーとして団体で市内の美術館、移民関係の博物館・資料館・慰霊碑、リベルダージ（東洋人街）、市場、スーパー、ショッピング街などを訪問することも可能ではある。ただし、大学に籍を置く場合、少なくとも2週間（最低10日間）滞在が必要で、それより短い期間となると、話し合いの必要がある。

筑波大学の短期プログラムでは、筑波大学がサンパウロ大学構内にオフィスを構えていること、プログラムを担当する教員がサンパウロ大学近くの出身者でサンパウロについて熟知していること、担当教員だけでなくもう1名同行すること、プログラム内の授業がすべてポルトガル語で行われるため渡航前のポルトガル語の授業を用意していることなど、手厚い体制を整えている。現地の情勢を把握しポルトガル語のできる教職員の同行が望ましいことを強感した。

一方、三重県人会もサンパウロと三重県の学生の交流事業には、独自で協力したいとの意向が強い。その場合、三重県関係者の店舗、農場などと連絡、実際に案内してもらうことが可能である。

コーヒー農園はサンパウロ近郊にはなく、最も近い場所が東山（とうざん）農場（カンピーナス市）で片道1時間半～2時間。これは独自企業なので、前もって旅行社を通じ車や運転手の手配が必要。

また、ホンダやトヨタのブラジル工場がカンピーナス市周辺にあり、出発前に本社にコンタクトをし、見学に組み入れることができると思われる。ただし、この予約手配に関しては、大学独自で行う必要がある。

アルモニア学園はサンパウロ市から車で4、50分程度の近郊にあり、日系人が中心になり、日本式の教育を取り入れた小、中、高校がある学園で、サンパウロ大学への進学率がトップクラスである。生徒は日系2割、非日系8割。小学校からポルトガル語のほか、日本語、英語、スペイン語が必修。学園では、ポルトガル語を子供たちとともに学びながら、日本語教育のアシスタントをしてくれる大学生スタッフを受け入れている。（訪問時、上智大学生2名が実習中）。その場合、寮費は無料である。これに三重大学生が関わることもできるが、実際ここで研修するには最低2週間程度が必要で、現実には難しいと思われる。サンパウロ大学での研修を行わない場合、可能となるが、サンパウロ市中心から遠く、また治安上も、空いた日に単独で外出は難しいと推測される。

3. 語学力の問題

ブラジル国内では店舗でも観光地でも英語はほとんど通じない。参加学生の基本的なポルトガル語能力は必須と思われる。共通教育でのポルトガル語初級履修や、独習での基礎力習得を参加条件にすることが望ましい。サンパウロ大学でのポルトガル学習の際は、既得語学力のチェックを行ってもらい、講義は基礎からレベルアップするための内容とすることが望ましい。

4. 研修費用の問題

研修を実施するのであれば、研修費用を50万円以内にするため、サンパウロ州内での研修を主にすべきである。往復飛行機料金約20万、宿泊費(16泊)約8万円、シティーツアー・郊外ツアーの費用1人10万円以内にと参加費40万程度で可能。(現地滞在費、パスポート申請、ビザ申請費用、事前の学習費用などは別)

5. 付き添い教員の問題

安全性、衛生、寒暖差や時差による体調管理の問題等のため、付き添い教員は2名が必要と思われる。できれば、そのうち1名はブラジルの社会情勢に精通した教員かポルトガル語のできる教員が望ましい。また、ポルトガル語のできる教員がない場合、随時通訳のサポートが必要で、サンパウロ大学に推薦を依頼するか、旅行社にプロの通訳手配を依頼するか、いずれかで、その費用を必要経費に組み込む必要がある。元交換留学生に依頼する選択肢もあるものの、大学の公式の研修であることを踏まえると、最善ではない。また、プロの通訳を依頼するにしても滞在期間を考慮すると、高額になることが推測される。

●実施までに検討及び対処が必要な課題

1. 参加者及び保護者が理解、納得できる安全対策

上記のように国のホームページの安全情報を読み、また渡航経験者の情報を得る限り、大多数の学生、保護者が治安と衛生面で不安を覚える方が自然という状況になっている。そのため、実施に際しては、保護者が納得し、少しでも安心感を増すいくつかの対応が必要と思われる。以下は考えられる内容。

- ・ 現地を熟知し、現地語に対応できる教員や関係者が企画し、引率スタッフに加わる。
- ・ 宿泊場所は大学・県人会などの関係施設、中級以上のホテルなど、比較的安全な地域にあり学生研修の実績を持ち、引率者が参加者全員を把握できる施設とする。
- ・ 団体行動を原則として、個人での自由行動はしないことを徹底する。
- ・ 研修中の事故、事件、病気等にすみやかに対応できる体制を作っておく。
- ・ 参加者に対して強盗等への備え、遭遇した場合の行動や注意点を熟知徹底させる。
- ・ 現地の衛生面での注意点を熟知徹底させる。
- ・ 企画スタッフが参加希望者とその保護者に、現地の状況と研修ツアーと安全対策、危機対応についての十分な説明を行い、質問にも対応できるようにする。また、研修中もできるだけ保護者に情報を送る体制も考える。

2. 参加学生のポルトガル語の事前習得

報告のように、ホテルや観光地やショッピング街や公的な場所でも英語が通じないことが普通であるため、日常会話程度のポルトガル語の事前習得を義務付ける。そのため、ある程度の期間(1年程度?)の事前の熟知期間及び学習期間を考慮する。 以上。

●出張調査関係写真



サンパウロ大学
左から→ワタナベ・サ大医学部
教授、藤本、川地、マリナさん、
森・サ大人文学部教授、カゲヤ
マさん

三重県人会

左から→影山さん（元交換留学生）、松本副会
長、藤本、下山会長、
ワタナベ・サンパウロ大学医学部教授、川地



ブラジル日本文化協会



日系福祉法人「憩いの園」イベント



移民博物館



ピナコテッカ美術館



東山農場 コーヒー園



同移民労働者の宿舎跡



日本移民史料館



リベルダーヂ (東洋人街)



アルモニア学園学長 (右) と経営陣、及び研修中の上智大学生

(4) 事業の意義

上記のように対処すべき課題は数多い。必ずしも容易とは言えず、多少の時間はかかると思われるが、これらをクリアし、三重大学の学生が研修として訪れ学ぶことのできる企画が実現できた場合は、学生同士の交流、若い世代の交流が進み、サンパウロ、及びブラジル全体への一層の理解につながる、更に、三重大学とサンパウロ大学の学生の交流を広げ、三重県とサンパウロ州の交流促進に資すると考えられる。

(5) 事業の発展性

課題の対処、及び企画、実行、いずれの段階においても、大学間のみならず、三重県庁（国際戦略課等）やサンパウロ州、現地の三重県人会との連携を進めること、企画実現の結果、大学生のような若い世代の交流を深めることが、今後の三重県とサンパウロ州全体との多様な交流の発展拡大に寄与すると考えられる。

(6) 中期目標・中期計画における位置づけ

(2) 国際化に関する目標

- 2 (外国人受入れと学生、教職員の派遣) 留学生、外国人研究者の受入れ体制及び学生、教職員の海外派遣制度を整備し、充実を図る。
- 3 (地域国際化支援) 地域の国際化・国際交流の発展を支援する

(7) その他